

# 発達障害のある子どもの新生児期における発達上の問題と母親の子育て困難感：発達障害児と定型発達児の比較

著者	梶 正義
雑誌名	研究紀要
号	18
ページ	1-7
発行年	2017-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1084/00000479/">http://id.nii.ac.jp/1084/00000479/</a>

# 発達障害のある子どもの新生児期における発達上の問題と母親の子育て困難感 －発達障害児と定型発達児の比較－

The Developmental Problems of the Children with Developmental Disabilities about the Infancy and the Psychological Stress of the Mother : The Comparison between the Children with Developmental Disabilities and The Typically Developing Children .

梶 正義\*  
Masayoshi KAJI

## Abstract

The purpose of this study was to clarify the differences between the children with developmental disabilities and the healthy children about the problem in case of development and the psychological stress of the mother by the questionnaire survey. It collected the data of 171 children with developmental disabilities (91.8% of collect-rates) and 61 healthy children (56.5 % of collect-rates). The results of doing an analysis of variance were as follows: (a) There were significant differences about the terrible tantrum, the trick of the physical condition, the chronic disease, the hyperesthesia. (b) It found that these problems were the psychological stress source of the mother.

**キーワード：**発達障害児, 定型発達児, 新生児期, 子育て

## I. 問題と目的

発達障害のある子どもの新生児期における発達上の問題を明らかにすることは、発達障害の子どもを早期に発見し、その問題を改善する方法につながることになる。そして、支援方法を子育て困難感をかかえる母親や子育て支援に関わる人々に伝えることによって、子どもの発達上の問題が改善され、母子相互作用の改善や母親のストレスの軽減につながり、発達障害そのものが改善される可能性も期待できる。

発達障害児の乳幼児期における問題については、アスペルガー症候群の子どもに摂食や睡眠、人と触れ合うことや社会的活動に大きな心配があった（Dewrang & Sandberg (2010)<sup>1)</sup>）という報告や発達障害リスクのある生後17か月－37か月児に摂食と睡眠の問題の見られた（Matson, Fodstad, & Mahan (2009)<sup>2)</sup>）という報告がある。また、睡眠の問題は母親の大きなストレスを生じさせ、夫婦関係や親子関係にもマイナスの影響を及ぼす（Quinn, 1991<sup>3)</sup> : Richdale, Gavidia-

---

\* 関西国際大学人間科学科

Payne, Francis, & Cotton, 2000<sup>4)</sup>) が指摘されている。

筆者の研究(梶(2016)<sup>5)</sup>)において、発達障害のある子どもの新生児期あるいは新生児期から1歳時にかけての発達上の問題として、激しいかんしゃく、眠るまでいつもぐずることや睡眠途中の覚醒、長時間の泣きという問題があることが示された。また、発達障害のある子どもが新生児期あるいは新生児期から1歳時にかけて示す「なかなか眠らない」「眠るまでぐずる」「眠った後途中でよく目を覚ます」の睡眠の問題、「よく泣く」「かんしゃくの回数が多い、長く続く、大変激しい」の泣きやかんしゃくの問題は、母親に大きなストレスを与え、疲労感やイライラ感を増大させ、一人ではどうしてもできなくて手助けを必要とする状態にしていることも明らかとなった。しかし、定型発達児の乳幼児期における子育ての問題としても、睡眠や夜泣き、泣きに対するなだめにくさやかんしゃくといった子どもの特性やこれらの特性が母親の大きなストレス源になっていることが指摘されている(羽山ら, 2010<sup>6)</sup>;野口ら, 2015<sup>7)</sup>)。発達障害の子どもが新生児期あるいは1歳時で示すかんしゃく、泣きや睡眠の問題は、発達障害のある子どもの感覚や知覚の偏りや特性により、程度も質も大きく増幅され、通常の子育ての問題からは想像できないほどに困難なものになっている可能性があると考えられるが、あくまでも想像の域をでない。そのため、発達障害児と定型発達児の新生児期の問題と母親の子育て困難感(ストレス)を比較検討することが必要である。

そこで本研究は、発達障害児の母親を対象に実施してきた子どもの特徴と母親の子育て困難感(ストレス)に関する調査を定型発達児の母親を対象に実施し、これまで得られた発達障害児とその母親のデータと比較して両群の差異を明らかにすることを目的とした。

## Ⅱ 方 法

### 1. 対象

発達障害児の質問紙調査は、調査協力の確認が得られた近畿地方、中国地方の発達障害児親の会会員に依頼した。243名に配布し回収できたのは223名(回収率91.8%)、その中から発達障害の確定診断を受けている171名とその保護者(ほとんどが母親)を対象とした。また、定型発達児の質問紙調査は、中国地方K市立保育園園児の母親に依頼した。108名に配布し回収できた61名(回収率56.5%)を対象とした。

### 2. 調査時期

発達障害児の調査は、2010年4月から2011年3月であった。また、定型発達児の調査は、2013年9月から10月であった。

### 3. 調査依頼、回答方法および回収方法

発達障害児の母親への質問紙調査は、発達障害児親の会の代表者を直接訪問し、多くの会員が集まる総会や研修会を利用して実施し、その場で回収してもらった。その後、代表者が回収した調査用紙を調査者が直接受け取った。定型発達児の母親への質問紙調査は、K市福祉部保育課よりK市立保育園に依頼し、発達障害など障害の診断がある子どもの回答用紙を除外した定型発達児の母親の回答用紙のみを回収した。

回答方法は、保護者に対象児の新生児期、1歳時、調査時の3時点について、6件法（6. 非常に当てはまる、5. かなり当てはまる、4. 少し当てはまる、3. 少し当てはまらない、2. あまり当てはまらない、1. 全く当てはまらない）で評価してもらった。

#### 4. 調査内容

発達障害児の質問紙調査は、梶（2016）<sup>1)</sup>と同じであり（表1および表2）、定型発達児の質問紙調査項目は、表1の\*印の項目を除く以外は発達障害児のものと同じであった。

表1 子どもの新生児期・1歳時・現在の健康と母親の健康に関する調査内容（1）

##### 第1部 回答者の属性等

1 回答者と子どもの続柄	7 居住年数
2 同居家族の人数	8 近所の発達障害への理解 *
3 回答者から見た同居家族と年齢 *	9 近くに物事を頼める家の有無と程度
4 住居	10 日常品の調達方法
5 近所への気遣い	11 住居の利便性
6 エレベーターの有無と利用 *	12 子どもが生まれるまでの母親の仕事状況

##### 第2部 子どもの属性等

1 性別 *	4 診断を受けた主障害 *
2 年齢 *	5 知的障害の有無と程度 *
3 現在の所属と発達障害名 *	6 きょうだいの有無と出生順

表2 子どもの新生児期・1歳時・現在の健康と母親の健康に関する調査内容（2）

##### 第3部 子どもの新生児期・1歳児・現在の健康と母親の健康

① なかなか眠らなかった	29 食事時間が長くなることが母親のストレスだった
② 眠るまでいつもぐずった	30 食べ物の好き嫌いが激しかった
③ 途中でよく目を覚ました	31 食べ物の好き嫌いは母親には大きなストレスだった
④ 母親はいつも睡眠不足であった	32 食事時の離籍・食べこぼし・残しが多かった
⑤ 母親は睡眠不足によるストレスが強かった	33 上記行動は母親には大きなストレスだった
⑥ 新生児期の授乳の種類	34 指示が通らない・言うことをきかなかった
⑦ 新生児期、お乳を飲む力は弱かった	35 上記行動は母親には大きなストレスだった
⑧ 新生児期、お乳を飲む時間は大変長かった	36 母親から離れられず泣いたりして困っていた
⑨ 新生児期、授乳時間に対するストレスが強かった	37 よく風邪・発熱・腹痛・下痢・嘔吐・頭痛が起る
⑩ 新生児期、お乳を吐いたりもどしたりした	③⑧ 慢性疾患の有無と種類
⑪ 新生児期、吐きもどしへのストレスが強かった	③⑨ 慢性疾患や病気からくる母親のストレスは大きかった
⑫ 長時間の泣いた	④⑩ 音に敏感で特定の音を極端に好んだり嫌がった
⑬ 泣きは母親には強いストレスであった	④⑪ 特定の色・形・模様を極端に好んだり嫌がった

14 子どもの体調は悪かった	42 触覚に敏感で特定の肌触りを極端に好んだり嫌がった
15 かんしゃくの回数は大変多かった	43 味・臭いに敏感で特定の味臭いを極端に好んだり嫌がった
16 かんしゃくの時間は長く続き、静まらなかった	44 子どもを抱くとき抱きやすかった
17 かんしゃくは大変激しかった	45 あやしたり、相手をすると喜んだ
18 かんしゃくは母親にとって大きなストレスであった	46 人見知りをした
19 母親の体調はよかった	47 何か興味のあるものを指さして母親に知らせた
20 子どもの情緒面はよかった	48 小さい子が泣いているのを見て心配した
21 母親の情緒面はよかった	49 よくほほえんだり笑ったりした
22 母親の疲労感は大きかった	50 子どもとの間に十分な愛着が育っている
23 母親のストレスは大きかった	51 同年齢の子どもとトラブルが絶えなかった
24 母親は手助けを必要としていた	52 多動で目が離せなかった
25 母親は誰の手助けを必要としていたか	53 折り紙・お絵かき・運動が大変器用であった
26 離乳は困難で順調にできなかった	54 大変我慢強く、切れたり怒ったりしなかった
27 離乳困難からくる母親のストレスは大きかった	55 大変すなおでやさしかった
28 食事時間は長くかかった	その他 自由記述

### Ⅲ 結果

本報告では、第3部の55質問項目の中から新生児期には該当しない項目（例：離乳、摂食行動、感覚過敏、対人関係、認知の発達、運動の発達など）を除外した30項目の各質問（表中の番号が□で囲まれている項目）に対する回答を従属変数、①障害の有無（発達障害児と定型発達児）、②発達の時期（新生児期、1歳時、現在）を独立変数とする2要因（ $2 \times 3$ ）の分散分析を行った。質問ごとに回答者数が異なるため、質問ごとの分析を行った。

#### 1. 新生児期における発達障害児と定型発達児の行動の比較

子どもの行動に関して分析した18項目（表2の番号が太字で表記されている項目）の中で、発達障害児と定型発達児の間に有意差が見られた項目が表3に示される。有意差の見られた項目は、かんしゃくの多さや激しさ、長さに関する内容と子どもの情緒面の良さ（逆転項目）、音や色・形等への敏感さ、触覚過敏、抱きにくさであり、これらの項目が発達障害児で有意に高いことが示された。また、かんしゃくの多さと激しさについては、発達障害児群と定型発達児群ともに新生児期が1歳児期・現在よりも有意に多くかつ激しいことが明らかになった。換言すれば、発達障害児群はどの発達の時期においても定型発達児群よりもかんしゃくの頻度も程度も有意に大きい。また両群ともに新生児期が1歳児期や現在よりもかんしゃくの頻度と程度ともに有意に大きいことが明らかにされた。

表 3 発達障害児と定型発達児の間に有意差が見られた項目

番号	質問内容	分散分析		
		発達障害児>定型発達児	新生児期・1歳時・現在	交互作用
15	かんしゃくの回数は大変多かった	$F(1,227)=10.324(p<.005)$	$F(2,227)=6.280(p<.005)$	n.s.
16	かんしゃくの時間は長く続き、静まらなかった	$F(1,227)=9.534(p<.001)$	n.s.	n.s.
17	かんしゃくは大変激しかった	$F(1,228)=13.609(p<.001)$	$F(2,228)=4.258(p<.05)$	n.s.
20	子どもの情緒面はよかった (逆転項目)	$F(1,225)=13.608(p<.001)$	n.s.	n.s.
38	慢性疾患の有無と種類	$F(1,213)=12.533(p<.001)$	n.s.	n.s.
40	音に敏感で特定の音を極端に好んだり嫌がった	$F(1,227)=43.817(p<.001)$	n.s.	n.s.
41	特定の色・形・模様を極端に好んだり嫌がった	$F(1,226)=23.242(p<.001)$	n.s.	n.s.
42	触覚の敏感で特定の肌触りを極端に好んだり嫌がった	$F(1,225)=24.482(p<.001)$	n.s.	n.s.
44	子どもを抱くとき抱きやすかった (逆転項目)	$F(1,226)=23.037(p<.001)$	n.s.	n.s.

## 2. 新生児期における発達障害児の母親と定型発達児の母親のストレス等の比較

母親のストレス等に関して分析した12項目（表2の番号が斜体で表記されている項目）の中で、発達障害児を持つ母親と定型発達児を持つ母親のストレス、母親の情緒の良さ（逆転項目）、母親の疲労感が大であり、これらの項目が発達障害児の母親で有意に高いことが示された（表4）。また、これらの3つの項目は、新生児期と1歳時・現在との間に有意差が見られるとともに、交互作用も認められ、発達障害児の母親と定型発達児の母親双方に新生児期における子どものかんしゃくに対するストレスや母親の疲労感の大きさ、情緒面の悪さが問題となっていることが示され、発達障害児をかかえる母親の疲労感の大きさや情緒面の問題が発達障害によって増大していることが示唆された。

表 4 発達障害児を持つ母親と定型発達児を持つ母親の間に有意差が見られた項目

番号	質問内容	分散分析		
		発達障害児>定型発達児	新生児期・1歳時・現在	交互作用
18	かんしゃくは母親にとって大きなストレスであった	$F(1,227)=6.238(p<.05)$	$F(2,227)=8.675(p<.001)$	n.s.
21	母の情緒面はよかった (逆転項目)	$F(1,228)=3.794(p<.1)$	$F(2,228)=4.426(p<.05)$	$F(2,228)=5.336(p<.005)$
22	母の疲労感は大かった	$F(1,227)=3.872(p<.05)$	$F(2,227)=2.603(p<.1)$	$F(2,227)=4.568(p<.05)$

### 3. 発達障害児と定型発達児との間に有意差がみられなかった項目

Q 1. なかなか眠らなかった, Q 2. 眠るまでいつもぐずった, Q 3. 途中でよく目を覚ました, Q 4. 母親はいつも睡眠不足であった, Q 5. 母親は睡眠不足によるストレスが強かった, Q12. 長時間泣いた, Q13. 泣きは母親には強いストレスであった, Q14. 子どもの体調は悪かった, Q19. 母親の体調はよかった (逆転項目), Q24. 母親は手助けを必要としていた, Q39. 慢性疾患や病気からくる母親のストレスは大きかった, の各項目については, 発達障害児と定型発達児との間に有意差は見られなかった。しかし, 新生児期と1歳時・現在との間には有意差がみられ, 新生児期における母親の子育てに関わる共通の課題であることが示唆された。また, Q 7～Q11の子どもの授乳の問題と母親のストレスに関しては, 発達障害の有無および発達時期ともに有意差が見られなかった。

## IV 考察

臨床経験上, 発達障害児の睡眠や泣きの問題が定型発達児より有意に大きいこと, 発達障害児の睡眠や泣きの問題に起因する母親のストレスは発達障害児の母親の方が有意に高いと予想されたが, 両群の子どもにも母親にも有意差はなく, 両群共に発達の時期の間には有意差があるのみであった。羽山ら (2010)<sup>6)</sup> や野口ら (2015)<sup>7)</sup> が定型発達児の乳幼児期における子育ての問題として, 睡眠や夜泣き, そして, 泣きに対するなだめにくさやかんしゃくといった子どもの特性をあげ, 母親の大きなストレス源になっていることが指摘されていることを報告している。乳幼児期における泣きや睡眠の問題については, 発達障害の有無に関わらず, 子育て上共通の問題であるかもしれない。しかし, 今回の調査の回収率に課題が残る。つまり, 発達障害児に関する質問紙調査の回収率は回収率91.8%, 定型発達児に関する質問紙調査の回収率が56.5%であり, 回収率に偏りがある。質問調査に回答した定型発達児の母親が, 子育てに悩む母親に偏っていた可能性も考えられる。また, 回収したサンプル数の偏りもみられることなどから, 定型発達児に関する質問紙調査を引き続き行い, 再度検討する必要があるかもしれない。

発達障害児と定型発達児の両群間に有意差が見られた特徴は, ①かんしゃくの回数・長さ・激しさと, ②子どもの機嫌の良くなさ, ③病気や体の不調, ④慢性疾患, ⑤感覚過敏 (聴覚・視覚・触覚刺激音への敏感さ, 抱かれにくさ) であり, 発達障害児に有意に多く, そのことが発達障害児の母親に有意に大きなストレスを引き起こしていることが明らかとなった。発達障害児の泣きや, 睡眠の問題が母親を睡眠不足に陥らせ, それが母親の大きなストレス反応を生み出すと考えられていたが, そうではなく, 体調や機嫌の悪さ, かんしゃくの方が母親の大きなストレス源であるということが明らかとなった。

## V 今後の課題

本研究の分析では, 回答者の属性と子どもの行動および母親の健康との関連, 並びに子どもの属性子どもの行動および母親の健康との関連, 母親の属性と子どもの属性との関連については取り上げられなかった。これらの関連を明らかにすることは今後の課題である。

また, 定型発達児の保護者の回答者数が少なかったこと, および回収率が低かったことが結果



を一般化するには若干問題があるように思われるので、今後、回答者数を増やし回収率の高い調査を実施することが大きな課題の一つであると言えよう。

加えて、後に発達障害が診断された子どもの新生児期の泣きと、定型発達をしている子どもの新生児期の泣きが母親に及ぼすストレスに差がなかったことについて、いっそう詳細な分析を行うことが今後の重要な課題であると思われる。発達障害児の中にはきわめて激しい泣きが長時間続き、母親が子どもと一緒に死ぬことさえ考えたことがあるといったことが臨床的には経験されているにもかかわらず、それらの問題が統計的には明らかにされなかったからである。

今回の調査では、障害種間の比較をする目的は含まれていなかったが、発達障害の子どもと他の障害の子ども、新生時期や1歳児期、現在（幼稚園児期）における子どもの行動および母親の健康との関連について調査することも重要な課題であると考えられる。障害種間で新生児期の行動に差があることが明らかにされれば、障害の本質に迫る重要な手掛かりが得られる可能性があるからである。

#### 【引用文献】

- 1) Dewrang, P., Sandberg, A. D. “Parental Retrospective Assessment of Development and Behavior in Asperger Syndrome during the First 2 Years of Life” *Research in Autism Spectrum Disorders*, 4 (3) , 461-473, 2010
- 2) Matson, J.L., Fodstad, J.C., Mahan, S. “Cutoffs, Norms, and Patterns of Comorbid Difficulties in Children with Developmental Disabilities on the Baby and Infant Screen for Children with autism Traits” *Research in Developmental Disabilities: A Multidisciplinary Journal*, 30 (6) ,1221-1228, 2009
- 3) Quine, L. “Sleep problems in children with mental handicap” *Journal of Mental Deficiency Research*, 35, 269-290, 1991
- 4) Richdale, A, Gavidia-Payne, S., Francis, A., & Cotton, S. “Stress, behaviour, and sleep problems in children with an intellectual disability” *Journal of Intellectual and Developmental Disability*, 25, 147-161, 2000
- 5) 梶正義「発達障害のある子どもの新生児期における発達上の問題と母親の子育て困難感と必要な支援に関する調査」『関西国際大学研究紀要』17巻, 41-50, 2016
- 6) 羽山順子・足立淑子・津田彰「新生児の母親に対する乳児の睡眠形成についての簡便な親教育」『行動医学研究』, 16巻1号, 21-30頁, 2010
- 7) 野口純子・三浦浩美・舟越和代・植村裕子・竹内美由紀・合田友美・榮玲子・宮本政子・松村恵子「子育て支援センターを利用している母親の育児ストレスと育児に対する自己効力感の検討」『香川県立保健医療大学雑誌』6巻, 29-36頁, 2015



